



Title	ロシア語圏のMP-UP移行期およびEUP
Author(s)	長沼, 正樹
Citation	交替劇 考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究 A01班2012年度研究報告書, 3, 46-56
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59510
Type	report
File Information	Naganuma2013 MP-UP transition period and EUP.pdf



[Instructions for use](#)

交替劇

「こうたいげき」

考古資料に基づく
旧人・新人の学習行動の
3
実証的研究

A 0 1 班 | 2 0 1 2 年 度 | 研 究 報 告

文部科学省科学研究費補助金（新学術領域研究）2010-2014

西秋良宏 編

目次 Contents

交替劇

A01班 | 2012年度 | 研究報告

はじめに 西秋良宏 i

研究報告 1

旧人・新人交替劇と両者の学習行動の違いに関わる考古学的研究

- 2012年度の取り組み 西秋良宏 1

旧石器文化の時空変異から「旧人・新人交替劇」の過程と要因をさぐる：

アフリカ、西アジア、ヨーロッパの統合的展望 門脇誠二 8

ヨーロッパにおける中期旧石器時代から後期旧石器時代への移行プロセス 佐野勝宏 27

ユーラシア極地への人類集団の進出と交替劇 加藤博文 38

ロシア語圏のMP-UP移行期およびEUP 長沼正樹 46

朝鮮・旧石器遺跡データベースの活用 長井謙治 57

日本旧石器時代の遺跡・集団・人口 仲田大人 61

交替劇関連遺跡・石器製作伝統データベースNeander DBの改良 近藤康久 73

石器接合資料における剥離作業の段階設定

- 北海道紋別郡遠軽町旧白滝15遺跡の接合資料を事例として - 高倉 純 78

投槍器をもちいた槍投げにおける上肢の動き 日暮泰男 87

カメルーン南東部の現生狩猟採集民における技術伝習と集落の空間構造に関する民族誌調査 中村雄紀 94

2012年度主催・連携研究会等 98**研究業績（2012年度） 118**

ロシア語圏のMP-UP移行期 およびEUP

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 長沼正樹

1. はじめに

2012年度までに入手した文献をもとに、ロシア語圏のMP (Middle Paleolithic中部旧石器) からUP (Upper Paleolithic上部旧石器) への移行期、およびEUP (Early Upper Paleolithic 上部旧石器前期) を概観する。

2. 地域区分と各地の特性

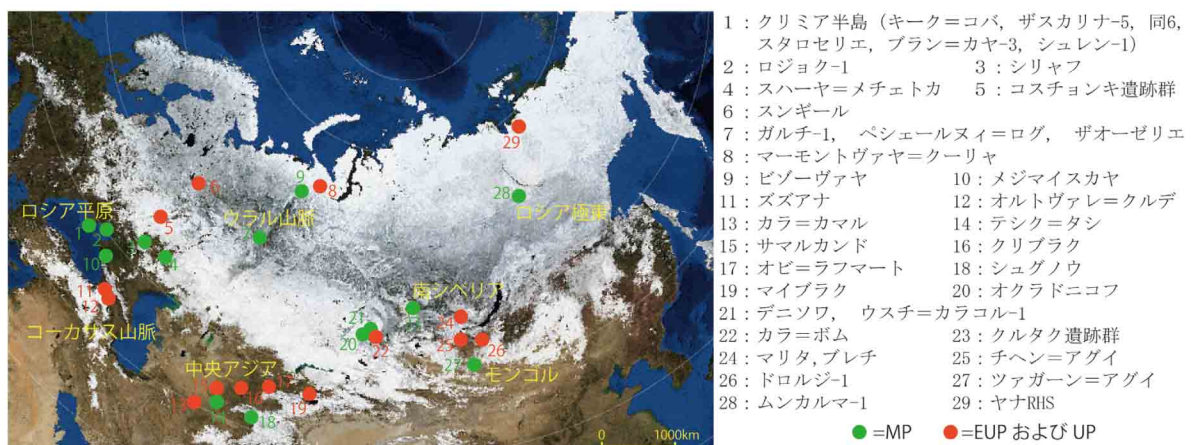
東ヨーロッパから中央アジアやシベリア、ロシア極東にいたる広大なロシア語圏では各地で旧石器研究の背景や発掘事例の多寡、到達水準が大きく異なっている。それらを交替劇の視点から整理するには、以下の7地域に分けて作業を進めることが実態に即しているとの見通しを、これまでに得ている (図1)。

①ウクライナ、モルドヴァ、ルーマニア東部を含むロシア平原。本地域はヨーロッパであり (東欧)、各国の自国語に加えてフランス語やドイツ語など、非ロシア語

文献も多い。②コーカサス山脈周辺。南麓 (グルジア・アルメニア・アゼルバイジャン) は旧ソ連ながら地理的に西アジアとされる場合もある。③ウラル山脈周辺。ヨーロッパとシベリアとの境界で地形上は北極圏にも通じる。④主要都市が点在し旧石器研究の歴史も古い南シベリア。西シベリア低地、アルタイ山地、ミヌシンスク盆地、バイカル・シベリアなどを含む。⑤中央 (内陸) アジア諸国。ソ連時代の学術文献がロシア語で現在もロシア隊の主導で調査研究が進められている。⑥モンゴル国。ソ連時代の学術文献はロシア語であったが近年、多様な各国語も増えた。⑦広大な面積のロシア極東。ロシア人研究者は文献中で北東アジアと呼ぶこともある。

現時点ではロシア平原南部のクリミア半島、および近接するコーカサス山脈の北麓でネアンデルタール人骨が出土している。またロシア平原の中央部からウラル山脈周辺にかけてロシア平原南部と共通する石器群が分布していることから、人骨は未発見ながら同じくネアンデルタールの生息域と推定できる。しかし中央

図1 言及する遺跡の位置
(ベースマップ作成：近藤康久)



※両時代の文化層がある遺跡は本文中で言及した文脈で着色

アジア諸国や南シベリアではネアンデルタール人骨の報告事例は少なく、遺存・出土状態もウズベキスタンのテシク=タシ洞穴(Окладников1949)を除くと断片的である。

南シベリア・アルタイ山地のデニソワ洞穴では、5.0～2.3万年前(未較正;以下同様)の主室11層で出土した人骨片から採取したDNAの解析で「デニソワ人」が提唱され(Krause et al. 2010など)、アフリカだけではなく北アジアや東アジアでも「広義のホモ・サピエンス」が進化・成立した可能性、つまり多地域進化説が改めて提起されている(Derevianko 2011など)。またバイカル・シベリアやモンゴルより東、北東アジアや東アジアなどネアンデルタールの分布が未確認の地域では、拡散したサピエンスが移住先でネアンデルタールとは別の先住民(旧人)と対面した可能性もある。こうした地域ではサピエンス側の行動や発現させた文化も、ヨーロッパを中心とするネアンデルタールの生息域とは異なっていたかもしれない(Nakahashi 2012)。

⑦のロシア極東は交替劇で焦点となるMIS-3に非サピエンスの先住民が存在した証拠は、皆無ではないが不確実である。2.9万年前の年代で北極圏に所在するヤナRHS遺跡(Питулько и Павлова 2010)、石英製の木葉形両面石器がMPとされるムンカルマ-1遺跡(Мочанов 2007)などが注目すべき事例だが、広大な面積に比べて発掘事例が少なく多くは将来に託されている。

3. MP-UP移行期とEUP

一般論としては、UPの担い手・作り手はサピエンスである。だが実際にはMP的な石器とUP的な石器が様々な程度や割合で共存する事例も、ロシア語圏には少なくないことも事実である。局地的年代指標(火山灰や古土壌層など)や各種の数値年代では、約4～3万年前(MIS-3 後半)に相当する。遺跡の形成過程などの理由で別時期の遺物が混ざったことが判明した場合は別として、MPとUPの両特徴を併せもつ資料は、サピエンスと先住民との交流や融合を反映しているかもしれない。こうした資料は移行期(transitional period)と呼ばれ、中央ヨーロッパでは石器伝統の定義・整理が進んでいるというが(佐野

2012)、ロシア語圏で石器伝統をめぐる議論が試みられているのは、現状ではロシア平原やコーカサス山脈周辺などの一部地域に限られる。

一方でEUPは、何らかの根拠・理由で人工遺物群をUPと評価した上で、その系列の中で古い部分との含意である。また学史的に旧知のEUPよりも数値年代が明らかに古いUPの人工遺物群が新たに発見された場合などには、特にIUP(Initial Upper Paleolithic)の用語が使用されることもある。ヨーロッパや地中海沿岸の代表的なEUPであるオーリナシアンは、ロシア語圏のアジア部分の大半で未確認ないし分布が希薄、要素的である。オーリナシアンに並行する年代にどのようなEUPの人工遺物群が存在していたのか、それら非オーリナシアンEUPと先行する在地のMPとの関係は連続的なのかそれとも断絶的なのか、との整理が重要となる。

4. 各地の様相

4.1. クリミア半島

黒海に突き出すクリミア半島には、MPとして東方ミコキアンの諸変異が分布する。東方ミコキアンは、石器素材に二次加工を多く加える両面石器や削器類を特徴とする石器伝統で(図2左下段)、ドイツ語圏で言うkeilmesser gruppenや、移行期文化のセレットィアンと密接に関連すると考えられる。小稿ではロシア人・ウクライナ人研究者に準じて「東方ミコキアン」の用語を用いておく。他に西部クリミア型ムステリアン、東方ミコキアンの地域変異としてキーク=コバ様相、アク=カヤ様相、スタロセリエ様相などの石器伝統が提唱されている(Чабай 2004)。ネアンデルタール人骨と数値年代の両方がある事例は多くない。ザスカリナ-6洞穴が3.9～3.0万年前、キーク=コバ洞穴には3.2万年前と5.5～4.0万年前の異なる評価がある¹⁾。

ブラン=カヤ-3岩陰では3.6～3.2万年前のEUP文化層(東方セレットィアンあるいは後述するストレツキアン)の上層に、MPのキーク=コバ様相の文化層が2.8万年前の年代で堆積していた(Marks and Monigal 2004)。両層とも人骨は不在であるが、キーク=コバ様相は他遺跡でネアンデルタール人骨を伴う。つまりEUP層が埋没した後に、ネアンデルタールが上層の石器群を残したことになる。またシュレン-1

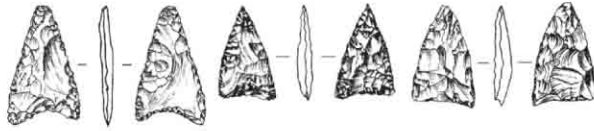
1) 他に「ただし書き」が付く例として、スタロセリエ洞穴で4.2～3.5万年前の子供の人骨がネアンデルタールとサピエンスの中間的な形態的特徴と評価され、ザスカリナ-5(アク=カヤ-1)岩陰でも、3.2万年前のネアンデルタール人骨にサピエンス的な特徴が指摘されている(Герасимова и др. 2007)。

図2

MPとEUPの代表的な石器
(引用文献より：一部改編)

ロシア平原・ウラル・コーカサス北麓

EUP (ストレッキアン)



ガルチ-1 (ウラル)
(Pavlov 2008)

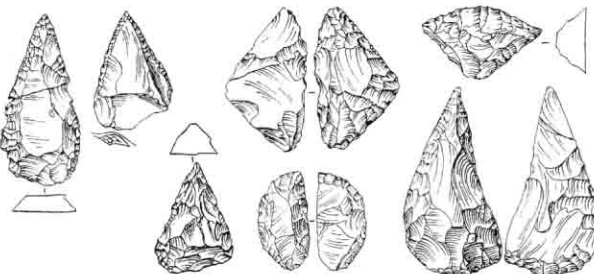


コスチョンキ-6 (Праслов и Рогачев 1982)

MP (東方ミコキアン)



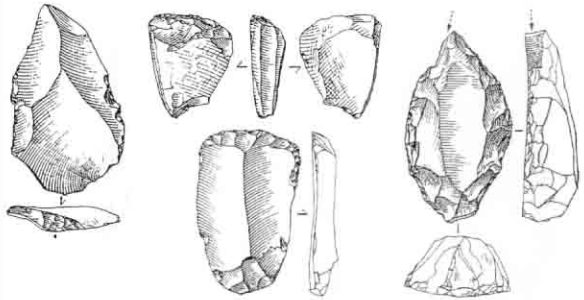
メジマイスカヤ (コーカサス北麓)
(Golovanova et al. 1999)



キーク=コバ (クリミア半島) (Праслов 1989)

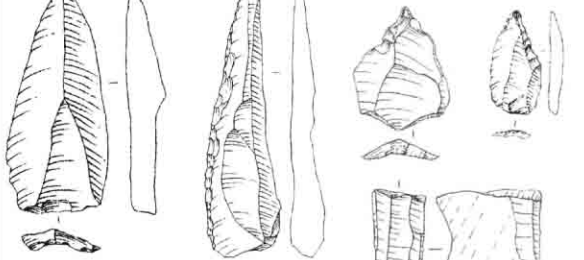
南シベリア・中央アジア・モンゴル

**EUP (ルヴァロワ+石刃 UP的な搔器や彫器
装飾品や顔料、簡素な骨器を伴う場合もある)**



ドロルジ-1 (Jaubert et al. 2004)

**MP-UP 移行期 (層位・数値年代が EUP 層と
MP 層の間)**

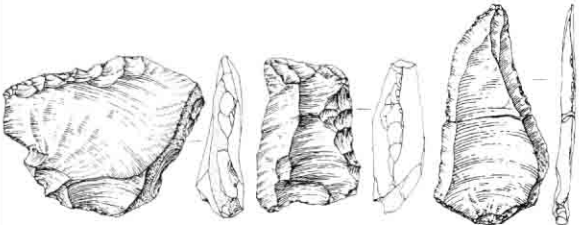


オビ=ラフマート 15-21 層
(Derevianko 2010b)

**MP (ネアンデルタール人骨を伴う、または層位・
数値年代が EUP 層や「移行期」層よりも下位・古い)**



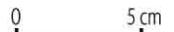
テシク=タシ (Окладников 1949)



デニソワ 14 層 (Деревяно и др.2003)



ツァガン=アグイ 第2堆積サイクル
(Деревяно и др. 2000)



岩陰ではサピエンスの歯を伴うオーリナシアン文化層の年代が、ブラン=カヤ-3岩陰のキーク=コバ様相と同じ2.8万年前である(Герасимова др. 2007: 212-214)。これらの事例は、年代測定や層位認識に問題がなければ、クリミア半島では2.8万年前頃までサピエンスとネアンデルタールの両方が活動していた証拠である。

4.2.ロシア平原の西部と東部

ロシア平原の西部はドニエストル川・プルト川の水系を中心に、東方ミコキアンを含む多数のMP遺跡が分布する(Анисюткин 2001、Степанчук 2006など)。EUPではオーリナシアン(3.3万年前～)やグラヴェティアン(2.9万年前～)が確認されている(Noiret 2004、2007)。この地域は本来、スロバキアやポーランド、ルーマニア中西部といったカルパチア山脈周辺の、非ロシア語圏を含めた東欧諸国との関係を整理する必要がある。これらについての文献調査は次年度の実施を予定しているので、詳しくは機会を改めたい。

ロシア平原の東部ではヴォルガ川・ドン川の水系で調査が進んでいる。ヴォルガ川に面するスハーヤ=メチトカ遺跡では、ローカルな地学編年でミクリノ期(MIS-5相当)とされる堆積物中から、木葉形・半月形を含む多数の両面石器が出土している(Праслов 1989)。やはり東方ミコキアンに関連するMPである。同じくヴォルガ川水系のシリャフ遺跡第8層では、¹⁴C年代・古地磁気年代・古土壌・花粉分析が整合的に4.0万年前を示した。人骨は出土していない。石器群はルヴァロワ+小口面型の石核による石刃生産を特徴とするものであり、調査者はMP終末と判断した(Нехорошев 1999、Nehoroshev and Vishnyatsky 2000、Нехорошев и др. 2003)。この特徴は中央ヨーロッパのボフニシアン、西アジアのエミラン、後述する南シベリアやモンゴルのEUPなど、広域に分布するルヴァロワ+石刃の石器群(Свобода 2001など)と類似している。アゾフ海北岸のロジョク-1遺跡では、ムステリアン包含層からサピエンスの歯が出土しているという(Герасимова и др. 2007: 161-162)。

4.3.コスタチョンキ遺跡群

ドン川水系のコスタチョンキ遺跡群では、厚い風成層中の埋没古土壌と広域テフラの層位的コンテクストの

中で複数のEUP文化層が調査・報告されてきた。調査例の多い石器伝統であるストレツキアン(=ストレツカ文化、あるいはコスタチョンキ・ストレツカ文化とも呼ばれる)は、平坦な二次加工が器体の両面を広く覆う石鏃や木葉形尖頭器を示準石器とし、剥片素材の搔器やMP的な削器類を伴う。石刃技術は乏しい(図2左上段)。二次加工に両面調整が卓越する点でMPの東方ミコキアンと類似する。継続期間は3.6～2.0万年前まで、EUP相当年代からMUPにまたがると推定されている(Anikovich 2005)。3.0万年よりも古い年代に人骨や骨角牙器、動産芸術の出土例はないが、新しい年代には2.8～2.3万年前のスギール遺跡(Бадер 1978など)で、サピエンス人骨²⁾に発達した骨角牙器と動産芸術を伴う。

このストレツキアンを一系の文化伝統と見る場合、その作り手が古い年代はネアンデルタールだったのが新しい年代にはサピエンスに交替したとは考えにくい。しかし古い年代もサピエンスとすると、東方ミコキアンと似た両面石器をサピエンスが作ったことになる。この地域では侵入者のサピエンスが、先住民のネアンデルタールから石器を学んだのであろうか。古い年代には現代人的行動が発現していない点も興味深い³⁾。

しかし同じコスタチョンキ遺跡群でも、別のEUPではストレツキアンの古い年代と同じ頃に現代人的行動が出現し、MPとは連続しない石刃石器群を伴う。スピツィニアンは広域テフラCI-Y5(約3.8万年前)の下位にもかかわらずC14年代は3.6～2.0万年前と、層位的所見と整合しない。珊瑚や動物の歯に穿孔したペンダントにサピエンスの歯を伴う。石器群は小石刃・石刃を素材とした多面体彫器など(Рогачев и Аникевич 1989、Вишняцкий 2008など)、「純粋にUP的」で先行するMPとの類似は認められない。オーリナシアンであるコスタチョンキ-1遺跡文化層IIIでも、1989年にサピエンスの歯を検出した(Герасимова и др. 2007: 83-85)。しかし当該文化層のC14年代は3.8～2.0万年前と幅広く、コスタチョンキ遺跡群におけるオーリナシアンの出現および継続年代の確定には至っていない。

コスタチョンキ-14遺跡文化層IVbはCIテフラの下位であることから、層位的には当地のEUPの中で最古である可能性が高い。しかし測定された年代値は3.6～3.2万年前(C14)、4.6～3.4万年前(IRSL)と不安定である(Sinityn and Hoffecker 2006、Velichko

2) スギール遺跡のサピエンス人骨には形態的にネアンデルタールに近い特徴が指摘され、ネアンデルタールとサピエンスが混血した子孫とする説や、それへの反論などの論争があるという(Алексеева и др.(ред.) 2000など)。

3) 西ヨーロッパのオーリナシアンも古い年代には磨製骨角器や装飾品の数は相対的に少なく、徐々に増えてゆく傾向があるという(佐野 2012)。

et al. 2009)。小石刃や不定形な彫器、両面石器などを含む石器群は、他遺跡に類例が認められないとされ石器伝統は未設定である。調査者の位置づけではIUPとされ(Sinitsyn 2003)、年代の評価次第で先述した「MP終末」のシリャフ遺跡第8層よりも古く、MP終末とIUPが年代的に逆転する可能性も含んでいる。サピエンスの歯が共伴し、「オーリナシアンの到来に先行して唐突に出現した現生人類」と解釈された(Anikovich et al. 2007)。

また象牙製彫像(未成品)、貝殻製ペンダント等の装飾品、骨製ポイントが出土したことも注目される。それらの造形は素朴である⁴⁾。なおロシア平原では多様なマンモス牙製の動産芸術や精巧な骨角製狩猟具は、2.5～2.1万年前頃の東方グラヴェティアンの地域変異とされる「コステンキ・アヴデヴオ文化」で出現し、以後増加するが(Хлопачев 2006など)、本文文化層をはじめEUP相当年代に各地で散見される簡素な骨角牙器や装飾品とは、完全に異質である。

まとめるとロシア平原では①東方ミコキアンを残したネアンデルタール、②シリャフ遺跡8層にルヴァロワ+石刃の石器群を残した集団、③ロジョク-1遺跡にムステリアンを残したサピエンス(?), ④石器がMPと類似し現代人的行動のないEUP年代のストレツキアンを残した集団、⑤石器がMPと断絶し装飾品のあるEUPスピツィニアンを残した集団、⑥簡素な彫像や骨角牙器をコステンキ-14遺跡文化層IVbに残した集団、そして⑦年代幅が不明なオーリナシアン、都合7つの集団が交替劇の出演者となり、きわめて複雑である。人骨の共伴が確認された例では①がネアンデルタール、⑤⑥⑦はサピエンスである。②③④の作り手はサピエンスを思わせるものの確実な証拠はまだない。

両面石器という点で類似して見える東方ミコキアンとストレツキアンではあるけれども、詳細に比較すると細部が技術的に異なっていると評価し、MPとEUPの間はやはり文化的に断絶するとの見解もある(Chabai 2003など)。またロシア平原には狩猟解体場遺跡(kill sites)が多いので解体作業用の便宜的な道具が遺跡に多く残された結果、両面石器や各種の削器類などMP的に見える器種が、EUPを通して長期的に出土しているにすぎないとの説明もある(Hoffecker 2011)。

4.4. ウラル山脈およびコーカサス山脈周辺

ロシア平原の北東部からウラル山脈周辺には、南北に延びる山地地形に沿って旧石器遺跡が点在す

る。MPではガルチ-1遺跡の下位文化層や、ペシエールヌイ=ログ遺跡が東方ミコキアンである(Pavlov 2008)。北緯63度のマームントヴァヤ=クーリャ遺跡では「マンモスの墓場」の4.0～3.0万年前の層から人工遺物が出土し、その年代からEUPとされるが、石器群は小規模で石器伝統の判別・設定は困難という。ガルチ-1遺跡の上位文化層はストレツキアンで(図2左最上段)、年代は2.8万年前である(Pavlov ibid.)。ザオーゼリエ遺跡はMP的なカイルメッサーとUP的な石刃製ツールを共に含む石器群で、3.4～3.3万年前の年代と鹿角製品や装飾品の存在からEUPとされている(Svendsen et al. 2010)。このようにMPに東方ミコキアン、EUPにストレツキアンがある点、MP的な器種とUP的な器種がEUPの年代で共存する点は、ロシア平原と共通している。

北緯65度のビゾーヴァヤ遺跡でもマンモスの墓場から人工遺物群が出土した。年代は3.0～2.8万年前(¹⁴C)、3.3～3.0万年前(OSL)で、石器群はMPとUPの両特徴をあわせ持ち、装飾品は不在である。当初はEUPと報告された(Pavlov ibid.)。しかし後にスリマからは「ネアンデルタールが作ったMP」と主張し、ヨーロッパの大半でEUPが展開していた同年代の北極圏付近に、ネアンデルタールのレフュージアが存在した可能性を提起した(Slimak et al. 2011)。人骨の出土を欠く推論であるが、クリミア半島のブラン=カヤ-3岩陰(キーク=コバ様相の文化層)とも整合する年代である。

黒海とカスピ海の間位置するコーカサス山脈は、西アジアのレヴァントやザグロス山地とロシア平原を結ぶルートの一つである。旧ソ連時代から洞穴遺跡の発掘調査が進められ、堆積物の地学的特徴や大型獣骨の動物相に基づく地質編年が議論された(Любин1977, 1989)。交替劇の観点では1990年代以後の数値年代を伴う調査が重要となる。山脈北麓の西部に所在するメジマイスカヤ洞穴では、地理的に近いクリミア半島と同様、東方ミコキアンの両面石器(図2左最下段)に伴って2.9万年前のネアンデルタール人骨が出土した(Golovanova et al. 1999, Ovchinnikov et al. 2000, Pinhasi et al. 2011)。南麓ではホスティニアンやツヒンヴァリアンなどMPの地域変異が区別され、レヴァントやザグロスのムステリアンとの類似性や関係が議論されている(Golovanova and Doronichev 2003など)。寒冷期に氷河が発達したコーカサスの主脈(グレートコーカ

4) 2011年1月にロシア科学アカデミー物質文化史研究所においてコステンキ-14遺跡文化層IVb出土の骨角牙器群を実見した。同研究所のA.A. Sinitsyn先生に御礼申し上げます。

サス)を境界として、おそらく南北でネアンデルタールの異なる文化圏が成立していたようである。

EUPはメジマイスカヤ洞穴の上層、ズズアナ洞穴、オルトヴァレ＝クルデ洞穴などの層位的事例と多数の数値年代から、石器が先行するMPと断絶すること、EUP出現の当初から骨器製作とペンダントやビーズなどの装飾品を伴うこと、最も類似する隣接地域の石器伝統はオーリナシアンではなく、むしろレヴァントのアハマリアンである等が判明しつつあるという(Golovanova et al.2010など)。先述のコスチョンキ遺跡群やウラル山脈周辺とはEUPが非オーリナシアンという点で共通する。一方で、MPとEUPとの間が連続しない、具体的にはストレッキアンのEUPの両面調整石器群が不在であることは大きな違いである。

4.5. 南シベリア

東方ミコキアンに類似した木葉形や半月形の両面石器は、アルタイ山地のデニソワ洞穴、ウスチ＝カラコル-1遺跡のEUP文化層(Derevianko and Shunkov 2001)、ウズベキスタンに所在するクリブラク遺跡のMP文化層(Абрамова1989: 159)、ロシア極東でMPの可能性のある「プロト・ジユクタイ文化」(Мочанов 2007)等の石器群の中にも類例が指摘されている。しかし、それらを含む石器群の全体をヨーロッパから遠く離れた地で「ミコキアン」と主張した文献は、管見では未確認である。一方でルヴァロワのMPの分布は、発掘資料では後述するアルタイ山地からミヌシンスク盆地(クルタク遺跡群など)まで確認されている。これらの一部は後期アシュリアンに関連づけられ、約30万年前の西アジア(レヴァント)から、シベリアへの集団移住が想定されている(Derevianko 2010a)。

より東のバイカル・シベリアやモンゴルでは、約20～3万年前のヨーロッパ等のMPに相当する年代に、礫器(礫石核)や不定形剥片を素材とした各種の削器類からなる、非ルヴァロワの石器群が確認・報告されている(図2右最下段)。円盤石核や鋸歯状・抉入石器、両端が尖る周辺加工削器(リマース)、斜軸収斂削器(デジュテ)など、ヨーロッパ的MPの類品を含む場合もある。現時点では石器伝統は設定されておらず人骨の共伴事例もない。これらの作り手は一部の年代については非サピエンスの先住民と考えられ、地理的にはネアンデルタールではない可能性もある。

シベリア南部からモンゴル北部にまたがるアルタイ

山地では、約4～3万年前のルヴァロワ+石刃の石器群に装飾品(ビーズ、ペンダント等)や顔料、簡素な骨製品を伴う人工遺物群が、IUPやEUPとして報告された(Derevianko 2001)。人骨の共伴例はデニソワ洞穴11層のみで、同層ではネアンデルタール、デニソワ人、種属不明人骨の3者が断片的に出土しているという(Gibbons 2011)。その包含層よりも下層で出土した石器群がMPであり(図2右下段)、ルヴァロワ生産物と扁平石核平行剥離による石刃生産が、ともに古い段階(＝より下位の包含層)から上層まで連続的に確認されている。連続的な石器群のうち下層をMPとする根拠には、RTL(放射性熱ルミネッセンス法)から直接、および古環境(花粉分析や小型動物相、堆積物の特徴など)から間接的に導いた年代も考慮されている(Деревянко и др. 1998、Деревянко и др. 2000、Деревянко и др. 2003、Derevianko and Shunkov 2005など)。

複数の重層遺跡でMPから上層のEUPやUPまで石器群の変化が連続的であるとの認識から、デレヴィアンコはMP(約7万年前)の担い手が、集団の交替や外部からの文化的影響なしに自ら石器群と身体を進化させ、6～4万年前の「MP-UP移行期」をへて4万年前にEUPを発現したと主張した(Derevianko 2010a)。冒頭で触れた「デニソワ人」もこの見解と矛盾しない⁵⁾。この議論への賛否とは別に、約4～3万年前の年代幅のルヴァロワ+石刃+装飾品や骨製品は、複数の遺跡で再現性があることは事実である。さらにアルタイだけでなくバイカル・シベリアにも、伴う石器群がやや異なる場合も含めて同様の年代で装飾品、顔料、簡素な骨製品が分布している(Derevianko and Rubin 2003)。

なお1998年に刊行されたカラ＝ボム遺跡のfield reportでは、「レヴァントからイラン高原、天山山脈北麓、アルタイ＝サヤン山脈にわたる広大な地域に単一の文化entityが存在していた」(Деревянко Петрин и др. 1998: 159)との認識が示され、そうした事象を名指して、ルヴァロワを含む扁平石核から石刃を生産する「カラボムスキー・プラスト」が提唱されていた。この時点で西アジアの「"transitional industry" of Emireh type」との類似が指摘されつつ、同時に在地的MPからUPが連続的に成立した可能性についても、すでに触れられていた。しかし後年、カラボムスキー・プラストという用語は文献中で使用されなくなる。一方

5) アルタイでネアンデルタール人骨に伴う「シビリヤチハ・ヴァリアント」(石器伝統)は、孤立的で当地本来の人類および石器の進化に影響を与えていない、当地で多くの文化層がEUP化している年代(4.5～4.0万年前: オクラドニコフ洞穴)にアルタイに存在した完全に異なる別の文化、等と説明されている(Derevianko 2010a)。

でアルタイを含む北アジア一帯では在地のMPからUPが連続的に進化したとの認識は、複数遺跡の石器群の分析結果をうけて強化されていったかに見える。

4.6. モンゴルおよび中央アジア諸国

上記の調査成果を経て、アルタイ以外のモンゴルや中央アジア諸国の石器群編年も再考された(Derevianko 2010b, Деревянко и др. 2010)。1990年代までは資料中の石器にルヴァロワの特徴が認められると、MP(ムステリアンやその地域変異)としての認識・報告が多かった(Окладников 1981, Деревянко и др. 1990, Вишняцкий 1996, Ранов и Каримова 2005など)。中央アジア諸国では1970年代までに採集資料のみの遺跡も含めて、デンテキュレイト・ムステリアン、ルヴァロワゾ・ムステリアン、典型的(山岳)ムステリアン、ソアン伝統ムステリアン(礫器を伴う)などの石器伝統が提唱されてきた(Davis and Ranov 1999)。一方では、これら全てを「石材環境や場の機能による違い」として、中央アジア全域を単一のMP石器伝統(通常ムステリアン)とする説も提示されていた(Вишняцкий 1996)。

ところが先述したルヴァロワ+石刃のEUPという可能性が浮上し、実際にモンゴルのドルロジ-1遺跡(図2右最上段)やチヘン=アグイ洞穴で3.0万年前に前後する年代が確認された。中央アジア諸国でもウズベキスタンのオビ=ラフマート洞穴(Сулейманов 1972, Деревянко (ред.) 2004)の上層など、層位と数値年代のある遺跡は約4~3万年前のルヴァロワ+石刃のEUPである可能性を示唆する。なお筆者は旧稿で、モンゴルで表面採集されたルヴァロワ関連石器群を「MPのムステリアン関連」で「ネアンデルタールが残した」と仮定したが(長沼2012)、EUPを含む可能性もある。ただし、より古い年代のMPにルヴァロワがないことを意味しない。層位や数値年代のない資料は、ルヴァロワの有無だけではMPかEUPかの区別が困難となったのが現状といえる。

中央アジア諸国ではオーリナシアンと類似するEUPも確認されている。代表例は、デュフォー小石刃やカリネーテッド搔器を含む石刃石器群が報告されたアフガニスタン北部のカラ=カマル岩陰である(Ранов и Каримова 2005)。アルタイ山地でも一部遺跡の文化層中にオーリナシアン的な要素が指摘されている(Otte and Kozłowski 2001)。カリネーテッド搔器の類品はウズベキスタンのサマルカンド遺跡、カザフスタンのマイブラク遺跡、タジキスタンのシュグノウ遺跡にもある(長沼2013)。これらのうちアルタイ山地以外の

一群は、UPの「クリブラク・ヴァリアント」(石器伝統)と仮称され、「ザグロス地方のバラドスティアンと類似」「オビ=ラフマート洞穴等のMP終末からUPへの在地の連続的移行とは別の、明らかな外来集団」と指摘されている(Ranov et al. 2012: 22)。

なお南シベリアやモンゴルで約4~3万年前の装飾品や顔料と簡素な骨製品を伴うEUP、および関連する年代や石器群(ルヴァロワ+石刃)には、現時点では狩猟具などの高度な骨角牙器や3D的な彫像は認められない。ルヴァロワ・ポイントの出土が目立つことから、担い手集団の狩猟具の主な槍先は石製であったと考えられる。一方で中央アジア諸国のカリネーテッド搔器に関連するEUPにも、高度に発達した骨角牙器や3D的な彫像は未発見である(有機質遺物の遺存条件にもよる)。3D的な彫像は、年代的に新しいバイカル・シベリアのアンガラ川水系の「マリタ・プレチ文化」に限定される。マリタ遺跡の現在の調査者らの認識では、遺跡や堆積物の形成過程がきわめて複雑ながら女性像の年代は先述したロシア平原と同様、約2.5~2.1万年前の間の可能性が高いようである(リプニナ2012)。これは交替劇という点では、むしろ終演後の年代といえる。

5. まとめ

見落としや不十分な点も多いと思われるが、交替劇の論点と考えられる内容を列挙して、まとめとする。

ネアンデルタールが残した石器伝統にも、東方ミコキアの地域変異やコーカサス南部の諸変異、注5でふれた「シビリャチハ・ヴァリアント」などローカルな変異がある。参照可能な年代から類推すると、約4~3万年前の新しい年代のネアンデルタールは各地に多様な文化圏を分立させていたらしく、彼らの文化が最後まで一様に停滞的・無変化とは言えない。この年代は、サピエンスと接触した後である可能性もある。

南シベリアからモンゴルに分布するヨーロッパのMP相当年代の礫器や不定形剥片の石器群は、現時点では人骨の出土例がない。考古学的な情報の質・量ともに十分ではないけれども、担い手がネアンデルタールではない可能性もある。

非オーリナシアン(EUP)では、ロシア平原を中心とするストレツキアン、南シベリアやモンゴル、中央アジアに広がるルヴァロワ+石刃のグループは、石器の特徴が各地で先行するMPと類似する。他地域から侵入したサピエンスの文化と先住民文化が融合したのか、それともアフリカ由来ではなく在地の進化プロセスでサ

ピエンスが発生したのか、他の論法でも説明できるのか等、先入観を排した検討が必要である。

ルヴァロワ+石刃のEUPは、人骨の確実な共伴例はないものの、西アジアやヨーロッパと年代や石器群の特徴が類似し、広域的な様相を見せている(ポフィニアン、パチョキリアン、エミラン等)。そこで交替劇の観点では約5万年前にアフリカを出たとされるサピエンスの、ユーラシア北方ルートへの拡散との関連が注目される(西秋2013)。今後はアルタイ山地やモンゴルの調査者が強調する「在地の先行MPとの連続性」を、どのように説明するかが課題となる。

現代人的行動の出現は、顔料と簡素な骨角牙器、動産芸術のうち装飾品が約4～3万年前のEUPである。伴う石器群(明らかな場合には石器伝統)は一様ではなく、年代のみが広域でゆるやかに共通する(コスチョンキ遺跡群の下層や南シベリアなど)。一方で高度な骨角製狩猟具や動産芸術のうち3D的な彫像の出現は2万年前台となり年代は新しい。つまり要素ごとに時間差がある。交替劇と関係するのは、年代的には前者のみかもしれない。今後の新発見でくつがえる可能性もあるが、遠く離れたロシア平原と南シベリアの間で共通していることから、調査頻度の多寡等によるバイアスではなく一定の有意性を認めたい。

[引用文献]

- Абрамова, З. А. 1989 Ранний палеолит Азиатской части СССР. В кн. Борисковский, П.Т. (ред.) *Палеолит СССР*. с.135-160, Москва, Издательство НАУКА.
- Алексеева, Е. И., Н. О. Бадер, Р. М. Мунчаев, Х. А. Амилханов, and И. В. Перевозчиков (ред.) 2000 *Ното Sungirensis-верхнепалеолитический человек: экологические и эволюционные аспекты исследования*. Москва, Научный мир.
- Anikovich, M. V. 2005 Sungir in cultural context and its relevance for modern human origins. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 22(2): 2-31.
- Anikovich, M. V., A. A. Sinitsyn, J. F. Hoffecker, V. T. Holliday, V. V. Popov, S. N. Lisitsyn, S. L. Forman, G. M. Levkovskaya, G. A. Pospelova, I. E. Kuzmina, N. D. Burova, P. Goldberg, R. I. Macphail, B. Giaccio, and N. D. Praslov 2007 Early Upper Paleolithic in Eastern Europe and implications for the dispersal of modern humans. *Science* 315: 223-226.
- Анисюткин, Н. К. 2001 *Мустьерская эпоха на юго-западе Русской равнины*. Санкт-Петербург, Европейской дом,
- Бадер, О. Н. 1978 *Сунгир-верхнепалеолитическая стоянка*. Москва, Издательство НАУКА.
- Chabai, V. P. 2003 The chronological and industrial variability of the Middle to Upper Paleolithic transition in eastern Europe. In Zilhão, J. and F. d'Errico (eds.) *The Chronology of the Aurignacian and of the Transitional Technocomplexes*, с. 71-86. Lisboa. Instituto Português de Arqueologia,
- Чабай, В. П. 2004 *Средний палеолит Крима: стратиграфия, хронология, типологическая вариабельность, восточно-Европейский контекст*. Симферополь, Институт археологии национальной академии наук Украины. Крымский филиал.
- Davis, R. S. and V. A. Ranov 1999 Recent work on the Paleolithic of Central Asia. *Evolutionary Anthropology* 8 (5): 186-193.
- Derevianko, A. P. 2001 The Middle to Upper Paleolithic transition in the Altai (Mongolia and Siberia). *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 3(7): 70-103.
- Derevianko, A. P. 2010a Three scenarios of the Middle to Upper Paleolithic transition scenario 1: the Middle to Upper Paleolithic Transition in Northern Asia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 38(3): 2-32.
- Derevianko, A. P. 2010b Three scenarios of the Middle to Upper Paleolithic transition scenario 1: the Middle to Upper Paleolithic Transition in Central Asia and the Near East. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 38(4): 2-38.
- Derevianko, A. P. 2011 The origin of anatomically modern humans and their behavior in Africa and Eurasia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 39(3): 2-31.
- Деревянко, А. П. (ред.) 2004 *Гром Оби-Рахмат*. Новосибирск. Издательство института археологии и этнографии, Российская академия наук Сибирское отделение (=以後Изд-во ИАЭ СО РАНと略記)
- Деревянко, А. П., Д. Дорж, Р. С. Васильевский, В. Е. Ларичев, В. Т. Петрин, Е. В. Девяткин, Е. М. Малаева 1990 *Палеолит и неолит Монгольского Артая: к конгрессу INQUA (Китай,1991)*, Новосибирск, НАУКА сибирское отделение.
- Деревянко, А. П., А. В. Кандыба, В. Т. Петрин 2010

- Палеолит Орхона. Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.
- Деревянко, А. П., Д. Олсен, Д. Цэвээндорж, В. Т. Петрин, С. А. Гладышев, А. Н. Зенин, В. П. Мыльников, А. И. Кривошапкин, Р. Ривс, П. Д. Брантингхэм, Б. Гунчинсурэн, Я. Цэрэндагва, 2000 *Археологические исследования Российской-Монгольской-Американой экспедиции в Монголии в 1997-1998 годах*. Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.
- Деревянко, А. П., В. Т. Петрин, Е. П. Рыбин, Л. М. Чевалков, 1998 *Палеолитические комплексы стратифицированной части стоянки Кара-Бом (мустье -верхий палеолит)*, Новосибирск. Изд-во ИАЭ СО РАН.
- Derevianko, A. P. and E. P. Rybin, 2003 The Earliest representations of symbolic behavior by Paleolithic humans in the Altai Mountains. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia*. 15(3): 27-50.
- Деревянко, А. П., М. В. Шуньков, А. К. Агаджанян, Г. Ф. Барышников, Е. М. Малаева, В. А. Ульянов, Н. А. Кулик, А. В. Постнов, А. А. Анойкин 2003 *Природная среда и человек в палеолите горного Алтая: условия обитания в окрестностях Денисовой пещеры*. Новосибирск, Изд-во ИАЭ СО РАН.
- Derevianko, A. P. and M. V. Shunkov 2001 Middle Paleolithic industries with foliate bifaces in Gorny Altai. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 1(9): 16-42.
- Derevianko, A. P. and M. V. Shunkov 2005 Formation of the Upper Paleolithic transitions in the Altaj. In Derevianko, A. P. (ed.) *Discussion: The Middle to Upper Paleolithic Transition in Eurasia. Hypothesis and Facts. Archaeology Ethnology and Anthropology of Eurasia*, с. 283-311. Новосибирск. Изд-во ИАЭ СО РАН.
- Герасимова, М. М., С. Н. Астахов, А. А. Величко 2007 *Палеолитический человек, его материальная культура и природная среда обитания*. Санкт-Петербург, Нестор-История.
- Gibbons, A. 2011 Who were the Denisovans? (News focus) *Science* 333: 1084-1087.
- Golovanova, L. V., J. F. Hoffecker, V. M. Kharitonov and G. P. Romanova 1999 Mezmaiskaya cave: a Neanderthal occupation in the northern Caucasus. *Current Anthropology* 40(1): 77-86.
- Golovanova, L. V., V. B. Doronichev, and E. N. Cleghorn 2010 The emergence of bone-working and ornamental art in the Caucasian UP. *Antiquity* 84: 299-320.
- Hoffecker, J. F. 2011 The Early Upper Paleolithic of Eastern Europe reconsidered. *Evolutional Anthropology* 20: 24-39.
- Хлопачев, Г. А., 2006 *Бивневые индустрии верхнего палеолита Восточной Европы*, Санкт-Петербург, Ленинград НАУКА.
- Krause, J., Fu, Qiaomei, M. Jeffrey, J. M. Good, B. Viola, V. Michael, M. V. Shunkov, A. P. Derevianko, and S. Pääbo 2010 The complete mitochondrial DNA genome of an unknown hominine from southern Siberia. *Nature* 464: 894-897.
- リブニナ・エカテリーナ 2012 「マリタ遺跡：旧石器文化と小さな彫像」吉田邦夫(編)『アルケオメトリアー考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』, 72-79. 東京大学総合研究博物館.
- Любин, В. П. 1977 *Мустьерские культуры Кавказа*. Ленинград. Издательство НАУКА Ленинградское отделение.
- Любин, В. П. 1989 Палеолит Кавказа. В кн. Ворисговский П.И. (ред.) *Палеолит мира -Палеолит Кавказа и северной Азии*, с. 8-141. Ленинград, Ленинград НАУКА.
- Marks, A. E. and K. Monigal 2004 Origins of the European Upper Paleolithic, seen from Crimea: simple myth or complex reality? In P. J. Brantingham et al. (eds.) *The Early Upper Paleolithic Beyond Western Europe*. pp. 64-79, Berkley and Los Angeles, California. University of California Press.
- Мочанов, Ю. А. 2007 *Дюктайская бифасиальная традиция палеолита северной Азии*. Якутск, Центр арктической археологии и палеоэкологии человека.
- Nakahashi, W. 2012 A mathematical model of cultural interactions between modern and archaic humans. In Akazawa, T. and Y. Nishiaki (eds) *Replacement of Neanderthals by Modern Humans: Testing Evolutionary models of learning*, с. 130-132. RNMH project group.
- 長沼正樹 2012 「交替劇とモンゴルの旧石器資料」西秋良宏編『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究2』「交替劇」A01班2011年度研究報告, 72-81.

- 長沼正樹2013「中央アジアにおける旧石器編年と旧人・新人交替劇」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学からみた交替劇—』, 六一書房.
- Нехорошев, П. Е. 1999 *Технологической метод изучения первичного расщепления камня среднего палеолима*. Санкт-Петербург, Европейский Дом.
- Nehoroshev, P. E. and L. V. Vishnyatsky 2000 Neanderthals and modern humans-discussing the transition: Central and Eastern Europe from 50,000-30,000BP. In Orschiedt, J. and G.-Chr. Weniger (eds.) *Wissenschaftliche Schriften des Neanderthal Museum*, Bd2: 256-266.
- Нехорошев, П. Е., Л. Б. Вишняцкий, Е. Г. Гуськова, Ю. Е. Мусатов, Т. В. Сапенко 2003 Результаты естественно-научного изучения поалеолитической стоянки Шлях. *Нижевожский археологический вестник* 6: 9-25.
- 西秋良宏2013「交替劇の時期と過程をめぐる諸問題」西秋良宏編『ホモ・サピエンスと旧人—旧石器考古学からみた交替劇—』, 六一書房.
- Noiret, P. 2004 Le Paléolithique supérieur de la Moldavie. *L'anthropologie* 108: 425-470.
- Noiret, P. 2007 Le Gravettien du Moldavie (30000-23000BP). *Paleo* 19:159-180.
- Окладников, А. П. 1949 Исследование мустьерской стоянки и погребения Неандертальца в гроте Тешик-Таш, южный Узбекистан (Средняя Азия). В кн. Гремяцкий, М. А. (ред.) *Тешик-Таш палеолитический человек*, с. 7-85. Москва, Издательство Московского государственного университета.
- Окладников, А. П. 1981 *Палеолит центриной Азии. Мойлтын ам (Монголия)*. Новосибирск, Издательство НАУКА Сибирское отделение.
- Otte, M. and J. K. Kozłowski 2001 The transition from the Middle to Upper Paleolithic in North Eurasia. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 3(7): 51-62.
- Ovchinnikov, I. V., A. Götherström, G. P. Romanova, V. M. Kharitonov, K. Lidén, and W. Goodwin 2000 Molecular analysis of Neanderthal DNA from the northern Caucasus. *Nature* 404: 490-493.
- Pavlov, P. Yu. 2008 The Paleolithic of Northeastern Europe: new date. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 33(1): 33-45.
- Праслов, Н. Л. 1989 Ранний палеолит Русской равнины и Крыма. Вкн. Борисковский, П.Т. (ред.) *Палеолит СССР*, с. 94-134. Москва, Издательство НАУКА.
- Рогачев, А. Н., М. В. Аникович 1989 Поздний палеолит Русской равнины и Крыма. В кн. Борисковский, П. Т. (ред.) *Палеолит СССР*, с. 162-271. Москва, Издательство НАУКА.
- Питулько, В. В., Е. Ю. Павлова 2010 *Геоархеология и радиоуглеродная хронология каменного века северо-восточной Азии*. Санкт-Петербург, Наука Санкт-Петербург.
- Праслов, Н. Д. and А. Н. Рогачев 1982 *Палеолит Костенско-Борщевского района на дону 1879-1979 : некоторые итоги полевых исследований*. Ленинград, Ленинград НАУКА.
- Ранов, В. А. and Г. Р. Каримова 2005 *Каменный век Афгано-Таджикской Депрессии*. Душанбе, Деваштич.
- Ranov, V. A., K. A. Kolobova and A. I. Krivoschapkin 2012 The upper Paleolithic assemblages of Shugnou, Tajikistan. *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 40(2): 2-24.
- 佐野勝宏2012「考古学的証拠に見る旧人・新人の創造性」『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究2』, 「交替劇」A01班2011年度研究報告, 16-24.
- Sinitsyn, A. A. 2003 The most ancient site of Kostenki in the context of the Initial Upper Paleolithic of northern Eurasia. In J. Zilhão and F. d'Errico (eds.) *The Chronology of the Aurignacian and of the Transitional Technocomplexes*, с. 89-107. Lisboa, Instituto Português de Arqueologia.
- Slimak, L., J. I. Svendsen, J. Mangerud, H. Plisson, H. P. Heggen, A. Brugère, and P. Y. Pavlov 2011 Late Mousterian persistence near the Arctic Circle. *Science* 332: 841-845.
- Степанчук, В. 2006 Нижній і середній палеолит України: хронологічні рамки, антропологічний тип носіїв культури, основні місцезнаходження решток вкопних людей. Матеріали і дослідження з археології Прикарпаття і Волині 10:17-49.
- Сулейманов, Р. Х. 1972 *Статистическое изучение культуры грота Оби-Рахмат*. Ташкент, Издательство «Фан» Узбекской ССР.
- Svendsen, J. I., H. P. Haggen, A. K. Hufthammer, J.

- Mangerud, P. Pavlov and W. Roebroeks 2010 Geo-archaeological investigations of Palaeolithic sites along the Ural Mountains -on the northern presence of humans during the last Ice Age. *Quaternary Science Reviews* 29: 3138-3156.
- Свобода,И. 2001 О перехода от среднего к верхнему палеолиту в северной Евразии. *Археология, этнография и антропология Евразии* 4(8): 30-37.
- Velichko, A. A., V. V. Pisareva, S. N. Sedov, A. A. Sinitsyn and S. N. Timireva 2009 Paleogeography of Kostenki-14 (Markina Gora) . *Archaeology, Ethnology & Anthropology of Eurasia* 37(4): 35-50.
- Вишняцкий, Л. Б. 1996 Палеолит *Средней Азии и Казахстана*. Санкт-Петербург, Европейской дом.
- Вишняцкий, Л. Б. 2008 *Культурная динамика в середине позднего плейстоцена и причины верхнепалеолитической революции*. Саткт Петербург, Издательство С.-Петербургского университета.

『考古資料に基づく旧人・新人の学習行動の実証的研究』 3

－「交替劇」A01班2012年度研究報告－

発行日◎2013年3月31日発行

編集・発行◎西秋良宏（「交替劇」A01班研究代表者）

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学総合研究博物館 TEL.03-5841-2491

印刷・製本◎秋田活版印刷（株）

〒011-0901 秋田市寺内字三千刈110-1 TEL.018-888-3500